

■ PCN だより

PCN Volume 62, Number 1 の紹介 (その 2)

先月号では、2008年2月発行のPCN Vol. 62, No.1に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者にお願いで日本語抄録をいただいたので紹介する。

Regular Article

1. Eating attitudes and body dissatisfaction in adolescents: Cross-cultural study

M. Kayano, K. Yoshiuchi, S. Al-Adawi, N. Viernes, A. S. S. Dorvlo, H. Kumano, T. Kuboki and A. Akabayashi, 17-25

青少年における食行動、やせ願望の異文化間比較

社会文化的要因は、摂食障害の様々な発症要因の中でも重要であると考えられている。しかし、異なる国や文化圏で、摂食行動の傾向を比較検討した研究は少ない。従って、本研究では日本を含めた5カ国の若年男女を対象として、体型や体重に対する姿勢や、やせ願望を比較検討することを目的とした。日本人411名、インド人130名、オマーン人135名、欧米人113名、フィリピン人196名の思春期の男女を対象とした。食行動や摂食態度の評価にEating Attitude Test-26 (EAT-26)を、やせ願望の評価にEating Disorder Inventory-2 (EDI-2)の下位尺度である「やせ願望尺度」の質問項目を施行した。インド、オマーン、フィリピン人では、欧米や日本人と比較して、やせ願望は著明ではなかったが、同等あるいは病的な摂食態度が認められた。インド、オマーン、フィリピンの各群におけるBody Mass Indexと摂食態度あるいは肥満恐怖の相関は、欧米諸国や日本群と異なるパターンを認めた。異なる国や文

化圏においては、摂食態度とやせ願望などの症状が異なる可能性が示唆された。

2. No differences are seen in the regional cerebral blood flow in the restricting type of anorexia nervosa compared with the binge eating/purging type

H. Yonezawa, Y. Otagaki, Y. Miyake, Y. Okamoto and S. Yamawaki, 26-33

神経性無食欲症制限型と無茶食い排出型の局所脳血流量に差はない

神経性無食欲症 (AN) は、制限型 (AN-R) と無茶食い排出型 (AN-BP) の二つのサブタイプに分けられる。これまで、この二つのサブタイプと健常対照との脳血流量の差異について、十分な検討はなされていない。そこで今回、われわれは、安静時のsingle photon emission computed tomography (SPECT)を用いて、ANの二つのサブタイプと健常対照群との脳血流量の差異を検討する研究を行った。AN-R 13名、AN-BP 13名、健常対照群 10名それぞれの安静時局所脳血流量 (rCBF) を、Technetium-99 m hexamethylpropyleneamine oximeをトレーサーとして用いて、SPECTで測定した。そして、画像解析ソフトthree-dimensional stereotactic surface projectionsを用いて画像処理を行い解析した。AN-R、AN-BP両群で、健常対照群と比較して、両側の梁下野 (SCG)、中脳、後部帯状回 (PCG) においてrCBFの低下を認めた。AN-R、AN-BP両群のrCBFに有意な差異は認められなかった。SCG、中脳、PCGを含む神経回路の異常がAN-R、AN-BP両群で共通して認められ

たことより、これらの異常はANに共通した病態と関連しているものと考えられた。

3. Addition of antipsychotics to medication regimens during schizophrenic inpatient care *A. Koyama, H. Ito, M. Nakanishi, K. Sawamura and T. Higuchi, 56-64*

統合失調症入院患者に対する抗精神病薬の追加投与

本研究の目的は、急性期治療を受けている統合失調症入院患者のなかで、入院期間中に抗精神病薬の追加投与を受けた者を同定し、追加投与と関連する要因を特定することである。対象者は34の急性期治療を行っている病棟の入院患者204人で、そのうち42人(20.6%)が入院期間中に抗精神病薬を追加されていた。追加投与されていない患者に比べて、これらの患者はより大量の抗精神病薬を投与された状態で退院しており、特に低力価抗精神病薬を投与されている者の割合が有意に高かった。入院期間中に攻撃的行動があった患者、身体疾患を有しない患者、及び主治医が日常的に非定型抗精神病薬よりも定型抗精神病薬をよく使用すると回答した患者は抗精神病薬が追加投与される可能性が有意に高かった。必ずしも必要でない多剤併用処方と避け処方を単純化するためには、攻撃的行動を起こす患者に対する集中的なケアや、処方に関する医師への積極的な働きかけが重要である。

4. Correlation between addictive behaviors and mental health in university students.

Y. Okasaka, N. Morita, Y. Nakatani, and K. Fujisawa, 84-92

大学生における嗜癮行動と精神健康との関連性

この研究の目的は嗜癮行動やその重複と、ストレス、他者からの受け入れ、人生の意味・目的といった精神健康との関連を明らかにすることである。調査は8大学691人の大学生に行われた。Eating Attitude Test-20 (EAT-20) によって食嗜癮群および食嗜癮傾向群を、久里浜アルコール

症スクリーニングテスト (KAST) によってアルコール嗜癮群およびアルコール嗜癮傾向群を、Fagerström Test for Nicotine Dependence (FTND) によってニコチン嗜癮群およびニコチン嗜癮傾向群を抽出した。次に、Visual Analog Scale (VAS) を用いてストレス、他者からの受け入れ感を、Purpose in Life Test (PIL) を用いて人生の意味・目的を測定し、嗜癮群と嗜癮傾向群、および嗜癮行動がない群を比較した。食とニコチンに関しては、3群間で有意差が見られたが、アルコールに関しては有意差が見られなかった。また、食、アルコール、ニコチンのいずれか1つの嗜癮行動に問題があった者は28.8%であり、2つの嗜癮行動に問題があった者は8.5%、3つの嗜癮行動に問題がある者は0.4%であった。1つの嗜癮行動しかない群、2つ以上の嗜癮行動がある群、嗜癮行動のない群の3群間ではストレス、他者からの受け入れ感に有意差が見られた。しかし、PIL得点に有意差は見られなかった。大学生の嗜癮行動やその重複に関して精神健康と関連性があることが示唆された。

5. Three cases of schizophrenia for which olanzapine was effective after early acute phase *N. Yamamoto, T. Oda and T. Inada, 93-97* 急性期前期以降にオランザピンが有効であった統合失調症患者の3症例

統合失調症患者の薬物療法における急性期前期と急性期後期の違いを明らかにする。不穏や興奮が強く入院を要した3名の統合失調症患者を対象とした。入院翌日までは、精神症状や行動障害を急速にコントロールする必要があり、それを標的としてリスペリドン内用液やハロペリドールの点滴を併用した。それ以後は、精神症状の安定に加えて服薬アドヒアランスの向上を標的としたオランザピンの単剤療法を試み、良好な治療結果が得られた。急性期は急性期前期と急性期後期に分けられ、各々の時期では治療戦略や臨床的アプローチが異なるため、それらを考慮した治療を行う必要があるものと考えられた。

Short Communication

1. Highly schizotypal students have a weaker sense of self-agency

T. Asai and Y. Tanno, 115-119

統合失調型パーソナリティの高い大学生は弱い自己主体感を持つ

統合失調型パーソナリティとは、統合失調症の前駆段階であるとされる性格特性である。統合失調型の傾向の高い人は異常な自己意識、特に異常な自己主体感を持つ可能性がある。実験に参加した大学生は、統合失調型特性尺度 (STA) を使って評価された。実験参加者がキー押しをすると、時間差があってから音が鳴るようになっており、彼らはその音を自分で鳴らしたと感じたかを判断した。その結果、統合失調型の高群は、低群に比べて弱い自己主体感を持つことが分かった。本研究は、実験的な手法を用いて統合失調型特性と異常な自己主体感との関連を示した。

2. Establishing the cut-off point for the Oppositional Defiant Behavior Inventory

Y. Harada, K. Saitoh, J. Iida, D. Sasayama, A. Sakai, J. Imai, H. Iwasaka, M. Hirabayashi, S. Yamada, S. Hirabayashi, T. Uchiyama and N. Amano, 120-123

ODBI (反抗挑戦的行動尺度) のカットオフ値の検討

反抗挑戦的行動尺度 (Oppositional Defiant Behavior Inventory, 以下 ODBI) のカットオフ値についての検討を行った。対象は、2001年12月から2007年3月までに、著者らの病院を受診し反抗挑戦性障害と診断された、6~15歳の未治療の男児56名である。対照は、都市部とその郊外の小中学校 (各2校) に通い、発達障害や行動障害による受診歴のない690名の男児である。

ODBIによって評価される男児における反抗挑戦性の程度は、分散分析によって有意差を認めなかったため、年齢群に関わらず評価可能であることが示された。スクリーニングされた子どもから反抗挑戦性障害の診断が必要な子どもを弁別するためのカットオフ値は、敏感度 (88.2%)、特異度 (90.0%)、陽性的中率 (75.0%) と陰性的中率 (95.7%) の値から20が適当であると考えられた。

3. Self-injury in Japanese junior and senior high-school students: Prevalence and association with substance use.

T. Matsumoto, and F. Imamura, 123-125

日本の中学生・高校生における自傷行為：その生涯経験率と物質使用との関連

本研究は、首都圏近郊にある12校の中学校・高校の生徒を対象とした自記式質問票調査により、リストカットなどの自傷行為の生涯経験率と飲酒、喫煙、違法薬物使用経験との関連を検討したものである。その結果、対象となった生徒2,974名中、9.9% (男子生徒7.5%, 女子生徒12.1%) にこれまでに少なくとも1回、故意に自分の身体を刃物で傷つけた経験があった。さらに対象を自傷経験の有無で2群に分けて比較すると、自傷経験のある生徒は、アルコール乱用、喫煙経験、違法薬物使用経験、違法薬物使用経験のある友人・知人の存在、違法薬物使用を勧められた経験がいずれも有意に高率に認められた ($P < 0.001$)。以上の結果から、思春期における自傷行為の経験は様々な程度の物質使用と密接な関係があり、将来の違法薬物使用を予測するリスク要因である可能性が示唆された。

(精神神経学雑誌編集委員会)